新規介護人材確保への取組み　第２報

～児童への介護に関する啓発活動の１つとしての福祉教室～

川田 麻津子[1)]　相場 健一[1)]　滝原 典子[1)]　美原 恵里[2)]

1)公益財団法人脳血管研究所 介護老人保健施設アルボース 看護介護部

2)公益財団法人脳血管研究所 介護老人保健施設アルボース 施設長

[背景]超高齢化社会を迎えた現在、介護人材不足は喫緊の問題である。当施設は平成24年度から地域の小学生に介護の仕事を紹介する「福祉教室」を開催し、これは平成29年度には群馬県老人保健施設協会から「介護への理解促進事業」[1)]として認定された。「介護への理解促進事業」は群馬県老人保健施設協会の基金事業であり、介護老人保健施設(老健)スタッフが学校や教師の研修センターに出向き、職場の魅力、介護職の魅力を発信することを目的とする。今回、この「福祉教室」の紹介、およびこの取組みにより児童の介護の仕事に対する認識がどのようになったかを検討したので報告する。なお、本研究は群馬県老人保健施設協会の同意を得て実施している。

[施設概要]病院併設型の老健である当施設は、入所定員100人(一般棟54床、認知症専門棟36床、ユニット10床、短期入所療養介護は適宜)、通所リハビリテーション定員32人で、超強化型老健の基準を満たしている。

[慰問の受入れ]当施設は平成8年開設当初から地域の小学校(3年生)の慰問を受け入れている。内容は児童による歌の披露、手紙や折り紙のプレゼント、レクリエーションなどである。

[福祉教室の内容]平成24年度より、慰問を受けている小学校から「総合」授業の講師依頼があり「福祉教室」を開始した。講師は介護福祉士2人と看護師1人の3人、対象は慰問に訪れた小学3年生、内容は1)祖父と孫の助け合いの気持ちをテーマとした「絵本の読み聞かせ」、2)高齢者と家族が介護に困っているところを介護福祉士が助言するという内容の「寸劇」、3)福祉用具の「紹介と体験」である。参加児童数は平成24年から7年間で延べ822人であった。

[対象・方法]慰問のみの時期の171人(A群)と、慰問に加え福祉教室にも参加した195人(B群)の児童より送られてきた感想文から、参加者が介護や介護職に対してどのような認識を抱いたかについて分析した。分析方法は手紙の内容を1つの意味毎にコード化し、類似性に基づきカテゴリー分類した。抽出者は1名とし、共同研究者2名が抽

出に問題がないか、不足はないかを再確認し、偏りのないように配慮した。データの分析過程では研究指導者のスーパーバイズを受けながら実施した。

[倫理的配慮]データは匿名化し個人が特定されないようにし、脳血管研究所倫理委員会の承認を得て実施した。

[結果]A 群は対象者 171 人から 361 のコードが得られ、小カテゴリーは「全体への感謝」「交流会への感謝」「ジュースの差入れへの感謝」「職員への感謝」「利用者へのエール」「職員へのエール」「楽しい交流会」「また利用者に会いたい」「利用者にしてもらいたいこと」「利用者にしてあげたいこと」「楽しいゲーム」「楽しい交流」「利用者に感じたこと」「施設に感じたこと」「経験したこと」の 15 項目、中カテゴリーは「全体への感謝」「交流会への感謝」「介護へのエール」「交流会で感じたこと」「経験したこと」の 5 項目、大カテゴリーは「感謝」「エール」「感じたこと」「経験」の 4 項目に分類された。

B 群は対象者 195 人から 805 コードが得られ、小カテゴリーは「全体への感謝」「交流会への感謝」「ジュースの差入れへの感謝」「来訪への感謝」「読み聞かせへの感謝」「寸劇への感謝」「用具体験への感謝」「用具について学んだこと」「施設について学んだこと」「高齢者の特徴について学んだこと」「介護について学んだこと」「利用者へのエール」「職員へのエール」「楽しい交流会」「元気な利用者」「楽しいゲーム」「嬉しいジュースの差入れ」「優しい職員」「利用者にしてもらいたいこと」「また利用者に会いたい」「楽しみな福祉教室」「良い話の絵本」「面白かった寸劇」「勉強になった用具体験」「また職員に会いたい」「介護の仕事をしたい」「意気込み」「職員へのお願い」「私がしたいこと」「経験したこと」の 30 項目、中カテゴリーは「全体への感謝」「交流会への感謝」「福祉教室への感謝」「介護に関する学び」「介護へのエール」「交流会で感じたこと」「福祉教室で感じたこと」「将来への意向」「高齢者にしてあげたいこと」「経験したこと」の 10 項目、大カテゴリーは「感謝」「学ぶ」「エール」「感じたこと」「希望」「経験」の 6 項目に分類された。

[考察]A 群に対し B 群には大カテゴリー「学ぶ」「希望」が追加された。これは福祉教室で「介護に関する学び」を得た児童が「希望」として「将来への意向」「高齢者にしてあげたいこと」を具体的に想起したことを示唆する。B 群の「希望」の中にある「介護の仕事をしたい」「意気込み」「職員へのお願い」「私がしたいこと」は、福祉教室において児童が介護を職業として認識し、介護職員への期待、将来自分が介護の仕事につくことのイメージに結びついたことをうかがわせる。「エール」に関しては A 群では「利用者へのエール」、B 群では「職員へのエール」が多くなるという逆転が見られ、福祉教室に参加したことで

介護福祉士を応援したいという気持ちが発生したと思われる。吉田は現役の介護職員が介護職を選んだ理由について、幼少時から祖父母や高齢者に対して肯定的な印象を抱いていることが理由の一つと述べている[2)]。当施設の取組みが、将来児童が進路を考える時期に介護が職業として選択される一助になることが期待される。

[まとめ]当施設は地域の小学校を訪れ、介護や介護職の魅力を伝え理解を深めるために「福祉教室」を行ってきた。活動の結果、慰問のみであった頃より、児童が介護の仕事に興味を持ち介護を職業として認識することに繋がった。

[参考文献]1)公益社団法人群馬県老人保健施設協会 2019 年度事業計画

2)吉田直美:「介護職の人材育成に関する一考察」,日本福祉大学経済論集第 42 号,2011 年 3 月